

1. 文学部・文学研究科

I	文学部・文学研究科の研究目的と特徴	1 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	1 - 3
	分析項目 I 研究活動の状況	1 - 3
	分析項目 II 研究成果の状況	1 - 5
III	質の向上度の判断	1 - 7

I 文学部・文学研究科の研究目的と特徴

文学部・文学研究科の研究の特徴は、何よりもまず高度で厳密な実証主義にある。京都大学創立以来の自由と自主の学風を継承するとともに、その伝統を発展させ、人類の英知を総体で扱う人文学における世界最高水準の研究を推進している。さらに、その成果を通じて地球社会に貢献することを目指している。表1にその目標を引用する。

表1：京都大学文学部の教育研究目的

- | | |
|---|--|
| 1 | 京都大学文学部は、知的な人間活動の基礎的解明と人類の根源的価値の再確立をめざし、人類の思想や言語文化、歴史、行動、さらには文化全体に関わる学術を教授研究する。 |
| 2 | 京都大学文学部は、人類文化の継承と地球社会の持続的な発展に寄与し、真に新しい文化創造の担い手となる、深い専門知識と広い教養を具え、かつ道徳的・応用的能力に優れた人材を育成する。 |
| 3 | 京都大学文学部は、地域密着的な視点と地球規模の広角的視点の両面から、京都・日本・アジアに固有の知的遺産の維持・継承・発展に寄与すると同時に、人類文化全般についての多元的・総合的探求を推進し、人類に共有される「あらたな世界像」の構築をめざす。 |
| 4 | 京都大学文学部は、地域連携と国際交流の強化を通じて、教育研究の成果を地域社会ならびに国際社会にひろく還元する。 |
| 5 | 京都大学文学部は、人権を尊重し、環境に配慮した運営を行うとともに社会的な説明責任に応える。 |

文学部・文学研究科では、研究と教育は表裏一体の関係をなし、両者を分離することはできないという理念のもとに、日常の研究活動と教育活動が行われている。研究目的は教育の目的と一体化し、表1の「教育研究目的」という形で制定されている。

本学部・研究科で扱うべき研究範囲は極めて幅広く多岐に亘っている。そのために、東洋文献文化学、西洋文献文化学、思想文化学、歴史文化学、行動文化学、現代文化学という6つの系を設け、さらにその中に教育・研究の最小の単位として合計31の専修が設けられている。同時に、近年の学問体系の発展と急激に変化しつつある現代社会の要請に応えるべく、専修や系の枠を越えた共同研究も進められている。

その成果は、個々の教員による著作の公刊という形で国内外に発信されるのはもとより、シンポジウムや講演会の形で公開され、地域社会、地球社会に還元されている。

[想定する関係者とその期待]

関係者とその期待として、1)国内外の各分野研究者：国内における最高レベル、国際的にも第一級の研究成果の公表、2)学外の研究所、美術館、博物館等の研究・教育施設：専門知識にもとづく研究協力、3)各地の教育委員会や文化財保護関係の組織等：専門知識の提供と助言、4)一般市民：最新の研究成果の還元、5)各省庁、公的学術機関（学術会議等）：専門知識にもとづく助言と運営への参加、等を想定している。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 研究活動の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

- 1) 論文、著書等の研究業績や学会等での講演、研究発表の状況は極めて活発であり、質の点においても高い水準を保っている。また量的にも増加の傾向にある。
- 2) 科学研究費補助金を始めとする外部研究資金の獲得状況も、平成 16 年度以来、高い水準を保っている。
- 3) 共同研究で重要なのは海外の研究者との共同研究である。教員が海外に出かけて行う場合と海外から優れた研究者を招へいして行う場合の 2 つがあるが、別添「資料 3」には、招へいのケースを示した。「外国人研究員(客員教授)」は、1996 年の大学院重点化とともに定員化された外国人客員教授ポスト(2 名分)を用いての招へいである。大学院生対象の授業を行うだけでなく、専任教員との共同研究を行うことがその重要な職務である。
- 4) 大学院重点化のなった 1996(平成 8) 年以來、研究科内で互いの研究活動を理解し、また一般市民にも広くその成果を紹介することを目的に、年 1 回のシンポジウムを開催してきた。それ以外に、各専修レベルで行う講演会や研究科附属ユーラシア文化研究センター(羽田記念館)の公開講演も、活発に行われている。

表 2 : ユーラシア文化研究センター公開講演会(平成 17 年度～平成 19 年度)

開催数	開催日	講演タイトル・備考
第 54 回	平成 17 年 6 月 4 日	1) 「カローシュティ―木簡に見る法と習慣」 2) 「The Pravargya rite of the Veda and the Gandhara Grave Culture(1600-900 BCE)」 共催：21 世紀 COE 研究会「古代世界における学派・宗派の成立と〈異〉意識の形成」「ユーラシア古語文献の文献学的研究」
第 55 回	平成 17 年 11 月 12 日	1) 「過ぎし年月の物語―テクストの構造と形成―」 2) 「聖人伝に何を問うか―『アルシディーン・ワリー伝』の世界―」 共催：21 世紀 COE 研究会「ユーラシア古語文献の文献学的研究」
第 56 回	平成 18 年 5 月 27 日	1) 「「イランの龍」訪問記」 2) “Tibetan Epic of Gesar” 共催：21 世紀 COE 研究会「ユーラシア古語文献の文献学的研究」
第 57 回	平成 18 年 11 月 25 日	1) 「世界の訓読み表記の中でのパルティア語訓読み表記」 2) 「ソグド語資料とコータン語資料」 共催：21 世紀 COE 研究会「ユーラシア古語文献の文献学的研究」

第 58 回	平成 19 年 6 月 23 日	1) 「ヤカウラングとリバーテカルヴァーン—ハザールジャート北部の歴史地理—」 2) 「チベット牧象図再々考」
第 59 回	平成 19 年 12 月 8 日	1) 「羽田亨博士収集「西域出土文献写真」資料をめぐって」 2) 「楔形文字スペリングの解釈—読むのか、読まないのか、それが問題だ—」

5) 文学研究科単独で応募した COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」(拠点リーダー: 紀平英作) が平成 14 年度～18 年度に採択された。また他研究科の教員を含む京都大学「心理学連合」が主体のプログラム「心の働きの総合的研究教育拠点」(拠点リーダー: 藤田和生文学研究科教授) も同じ期間に採択されている。

観点 大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に係る状況) 該当なし

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

1) 論文、著書等の研究業績や学会等での研究発表の状況 (別添「資料 1」参照)

常勤の全教員の平成 16 年度～19 年度の業績点数は「資料 1」に示す通りである。著書・編著書ならびに論文数が 3 年間で順調に増加し、他の項目を考慮しても、全体として増加の傾向にある。また各年度の教員 1 名当たりの平均も同様に高い水準を保っている。これらの業績の多くは、国内の権威ある雑誌あるいは国際誌に掲載された論文、あるいは書評等で高い評価を得た著作であり、内容的に高い水準を保っている。

2) 外部研究資金の獲得状況 (別添「資料 2」参照)

科学研究費補助金を始めとする各種外部研究資金の受入状況は「資料 2」にある通り、平成 16 年度以来高い水準を保っている。教員数に対する科研費の獲得率も、単純計算で、ほぼ各年度とも常勤の教員数 1 人当たり 0.6 件以上と、高い水準を保っている。

3) 共同研究の実施状況 (別添「資料 3」参照)

「資料 3」に海外からの研究者の招へいの状況を示す。3つのカテゴリーのいずれも、平成 15 年度以来、高い水準で推移している。「外国人研究員(客員教授)」招へい制度による招へいも十分効果をあげている。

4) 文学研究科主催のシンポジウム

平成 16 年以降は次の「表 2」のような企画を行った。第 12 回を除き、いずれも 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」と共同で開催した国際シンポジウムである。第 10 回は、2005 年 4 月の北京大学歴史学部との学術交流協定締結を記念して開催されたものである。

表3：文学研究科シンポジウム

第9回	平成16年12月4日	「空間の行動文化学」
第10回	平成17年12月17日	「京都と北京：光の交わるところ—学問知から人類知へ—」
第11回	平成18年12月2日	「グローバル化時代の人文学 —対話と寛容の知を求めて—」
第12回	平成19年12月2日	「世界地図と世界文学」

また、2006年9月にはケンブリッジ大学において、同大学古典学部の協力を得て、Kyoto-Cambridge International Symposium “Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy”を開催した。

5) 21世紀COEプログラム

a. 「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」では個別の国、地域に焦点を当てた伝統的方法から発展し、地球規模での人間存在の諸相を総体として理解することを目指す研究プログラムが進められた。15の研究班が作られ、その成果は基本報告書、総括報告書、個別成果、研究叢書、個別報告書合計43点(51冊)にまとめられている。またb. 「心の働きの総合的研究教育拠点」では実験科学、フィールド科学、臨床実践科学としての心理学を統合し、人間の心の働きを総合的に理解する研究プログラムが進められた。その成果は、プロジェクト参加者による多数の個別の業績の他、研究者向け英文書籍、和文叢書計13冊にまとめられた。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況) 文学部・文学研究科の研究の目標をよく表す優れた研究成果を紹介する。番号は「研究業績リスト(I表)」の業績番号である。

東洋文献文化学系では、日本・中国・チベット・インドにおける古典のあり方について、諸本の比較研究(1023)、テキスト校訂と訳注(1012, 1013)、重要な文言の考証(1017)といった文献学的考察から方法論的批判(1011)に至るまで幅広い研究が行われており、東洋の知的遺産の維持・継承に尽力し、その思想や言語文化の高度な理解に努めている。

西洋文献文化学系では、ヨーロッパならびにアメリカの言語と文学について研究が行われている。言語を様々な側面から考察した精緻な研究(1024, 1027)、文学を他の芸術ジャンルや身体との関わりで探求する新しい方向の研究(1018, 1019, 1021)、個別の作家に関する最新の知見に基づく研究(1020)、神話を新たな視点から読み解こうとする研究(1022)のいずれもが、「知的な人間活動の基礎的解明と人類の根源的価値の再確立をめざす」という目的にかなった形で進められている。

思想文化学系では、西洋及び日本の哲学と美学美術史について、時間的・空間的に広範で多彩な研究が行われている。哲学については、西洋の古代(1008)、中世(1006)から近現代(1005)までの歴史的探究ならびに現代的手法を用いた理論的分析(1007)に加えて、日本の哲学(1010)をも含む包括的な研究が行われている。さらに倫理(1009)、宗教(1014, 1015)などの諸現象についても理論的な解明が進められている。さらに美の歴史について日本(1016)と西洋の両方にわたる実証的研究が進められている。

歴史文化学系では、文学部創設以来1世紀に亘って強固に構築されてきた文献史学の伝統を継承しつつ、在来文献と出土文字資料の総合(1031)、日本史、東洋史、歴史地理学等の既存の枠組の超越(1028, 1030)、新たな分野に関する基礎史料の公刊・訳注(1032)、ヨーロッパ史に対する新たな視座の構築(1034, 1035)、考古学資料の再評価(1037)と新たな発掘成果の提示(1036)など、多岐に渉る研究が展開されている。

行動文化学系では、人間行動とその文化を、空間と時間の2つの次元において、個人に外在する要因と内在する要因の両面から、実験的方法を用いて解明する極めて多面的な研究が行われている。霊長類の情報処理(1002, 1003)、言語理論(1025)や古語文献(1026)、共同体(1038)やジェンダー(1039)、さらに地震防災(1004)など、多様で幅広い研究成果が生まれており、その一部は、国際シンポジウム「空間の行動文化学」(2004年12月)を通じて社会や学界に広く発信された。

現代文化学系では、政治・社会・文化・思想から自然科学・情報学なども含む極めて幅広い対象を、「現代社会」という視点を軸に、各分野が有機的な関係を保ちつつ研究している。天皇の軍務親裁(1029)や白人性の問題(1033)の研究は、現代社会の諸問題に直結し、高く評価され、あるいは重要な論点提起として論争を引き起こした。また、従来の決定論的論理観と大きく異なる観点から情報学のための新論理学を構築する研究(1001)などの重要な研究がある。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由) いずれの業績も、国内外で大きな反響を呼び、あるいは重要な研究と位置づけられているが、次のような客観的指標を示すことができる。

それぞれの研究領域で権威ある国内の学会誌等に査読を経て掲載された業績として1023、とくに依頼を受けて執筆・掲載されたものとして1013がある。また重要な出版物に執筆を招請されたものとして1029、1033がある。1014は公的資金の援助を受け刊行された。

海外の雑誌、国際誌に査読を受けて掲載されたものとして1001、1002、1003、1004、1009、1011、1025がある。1019は海外の学術誌等に掲載された複数の論文にもとづく著作である。1012は当該分野における世界最先端の研究である。1020は当該分野の権威として海外の出版社より寄稿を求められたものであり、1026や1039も海外からの招請による寄稿である。

また、国際学会で行った招待講演等が公刊されたものとして1001、1005、1011、1015がある。

学術的な賞を受賞したのものとして1007(第20回和辻哲郎文化賞)、1016(第18回国華賞)、1038(2007年度大同生命地域研究奨励賞)がある。1021は2003年度日本独文学会賞を受けた論文の姉妹編である。

新聞の書評等で紹介されたものとしては1003、1006、1007、1008、1010、1019、1022、1026、1028、1033、1037があり、学術雑誌等専門誌の書評で取り上げられ高い評価を得たものとしては1010、1014、1016、1017、1018、1022、1024、1027、1031、1034、1035がある。その中には国外でも書評、紹介された業績も多い。1024、1027、1030、1031、1032である。さらに、業績そのものが外国語に翻訳されたもの、あるいは計画中のものとして1030、1032、1034、1037、1039がある。

高度の学術的内容を持つと同時に、一般の読者層をも対象とし、「教育研究の成果を地域社会ならびに国際社会に広く還元する」という目的に適う業績としては1010、1018、1022、等がある。1036や1037は研究成果が国際社会に還元された例として重要である。1026も未読文献の解説という形での国際貢献の例である。

以上により、いずれの研究領域においても、優秀あるいは卓越した水準の業績を多く有し、かつ海外への発信を行い、全体として期待される水準を上回ると判断される。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例1 「既存の専門の枠を越えた共同研究の実施」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取組) 法人化と並行して平成14年から行われた21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」においては、専修、系を横断する形で多くの研究班が作られ活動した。例えば「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」には歴史文化、行動文化、「ヨーロッパにおける人文学知形成の歴史的構図」には歴史文化、西洋文献文化、思想文化、「ユーラシア古語文献の文献学的研究」には東洋文献文化、西洋文献文化、歴史文化、行動文化各学系の教員が参加し、共同研究により大きな成果を挙げた。これは人間とその文化への多様なアプローチの推進という面からみて、大きく向上している例である。

②事例2 「歴史学用ソフトウェアの開発」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取組) 法人化後に、現代文化学系に、情報関連の科学・工学も専門とする教員が加わったことにより、情報史、情報社会学、さらには歴史学用ソフトウェアの開発などの新側面が加わり、さらには、そのソフトウェアの現代史研究への適用が計画された。これは分野間の協調による、相応の質の向上の例である。

③事例3 「高水準の研究レベルの維持と展開」(分析項目Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組) いずれの系、専門分野も従来の高水準の研究レベルを維持し、発展させることにつとめてきた。例えば東洋文献文化学系では日本文学と中国文学の専門家が和漢聯句を対象に従来にない総合的研究を行った。また歴史学の分野でも、史料分析の精緻化、分野横断の展望、世界的にも全く新しい領域の開拓などの点において、質的な向上を遂げている。アジアに固有の知的遺産の維持・継承・発展と、人類文化全般についての多元的・総合的探求の推進という目的からみての、大きく向上し、あるいは高い質を維持している例である。

④事例4 「研究成果の海外への発信」(分析項目Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組) 西洋文献文化学、思想文化学、行動文化学を始めとして、いずれの系、専門分野も、多くの研究業績が、海外の有力な学術雑誌への寄稿、国際学会での講演とその結果の公刊というように、様々な形で国際的に発信されたものである。その成果が広く内外から承認されている事実は、国際交流の強化を通じて、教育研究の成果を地域社会ならびに国際社会にひろく還元するという研究教育目的の実現において、高い質を維持している例である。

⑤事例5 「現代社会の内包する諸問題への取り組み」(分析項目Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組) 思想文化学系や行動文化学系、現代文化学系では、情報倫理や宗教的寛容、ジェンダーや家族の問題、また現代社会の様相といった、現代社会の持つ諸問題に対しても、具体的に取り組み成果を挙げた。これは、社会的な貢献という点で、相応に向上している例である。